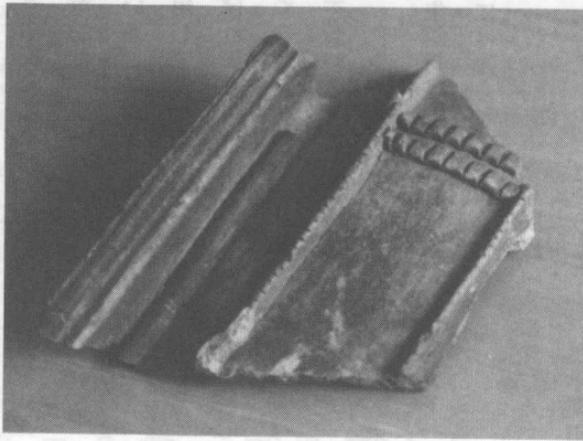


# 古代の別府と朱

佐藤 暁



鉄輪温泉

街の北部の

丘陵上に、

北鉄輪遺跡

がある。こ

の遺跡から

発見された

弥生式中期

末、後期初

めの土器の

壺や高杯たかつきな

どには、口

の部分に円盤状の粘土を貼りつけたり、首や肩の部分に

粘土で帯をめぐらして美しく装飾しているものがある。

それよりもまして注目すべきは、朱で赤く彩色されてい

ることである。

北鉄輪遺跡に立つと、丘の下に噴出する地獄や温泉の

湯煙りをへだて、鶴見権現（火売火女神社）の森や鶴見

岳を仰ぐことができる。

朱で彩られた土器は、日常生活に使用する器ではなく、

神を祭るための土器と考えられているから、北鉄輪遺跡

は、火を吐く山（火山）鶴見岳を神と祭った遺跡と考

えて差支えない。

この北鉄輪遺跡の土器に施色された朱は、どこで採集

されたのであろうか。

一般に朱と呼ばれる顔料は、水銀朱（ $HgS$ ）とベン

ガラ（ $Fe_2O_3$ ）および鉛丹（ $Pb_3O_4$ ）の三種である。

水銀朱は、俗に天然に辰砂として産出される。きれいな

水銀朱を得るには、辰砂を砕き摺りつぶして粉末にした

あと水簸すひをするとよい、水銀朱の比重は八・〇九。ベン

ガラは比重は二・〇であるから水洗によって簡単に分離することができる。ベンガラは天然に産するのみならず日本全土どこにでもあって古くから使われていた。赤星直忠氏によれば、横須賀市吉井城山第一貝塚では、水銀第二鉄（高師小僧）を加熱し、摺りつぶして粉末にしている。このように繩文式の時代からベンガラを生産し使用していたのである。鉛丹は、光明丹・赤鉛・丹などと呼ばれ天然には産出しない。鉛を融解して約六百度で空気を通すと黄色に変化し、長時間加熱すると赤色となる。正倉院の宝物のなかに鉛丹の包みが一二八あり、上・中・下に区別されているし、『魏志』東夷倭人の条に「真朱鉛丹各五十斤」と記録があるから、日本でも三世紀頃には知られていたらしい。

わが別府市でも辰砂（水銀朱）とベンガラは産出する。

『古代の朱』という本を書いた早稲田大学名誉教授の松田寿男氏は、大分市坂の市地区丹生や大分郡野津原町丹生山と共に、別府市乙原の別府鉞山や血の池地獄からも水銀朱が検出されると書いている。別教組文化部が発行した「別府地方産鉞物の研究」にも別府鉞山での辰砂の

産出が記録されているほか、血の池地獄の赤泥は「代赭石」と称するもので褐鉄鉞を混ざる」とあり、昭和二六年刊の『大分県の地質と地下資源』によると、柴石温泉も水酸化鉄の沈澱層があり、その層から柴石（化石）が発見されるという。

さて、辰砂からは水銀を作る。この方法は、辰砂を土製の釜にいれ、熱して水銀を気化させ、ガスを水中に導くと、水銀は水中で粒状となって分離する。

日本古来の鍍金法は、水銀五にたいし金一の割合で水銀に金を溶かし、それを銅の表面に塗り、後で加熱して水銀を蒸発させるアマルガム鍍金であった。

『大仏殿碑文』によると、奈良の大仏では「用熟銅七十三万九千五百六十斤 白錫一万二千六百八十斤 鍊金一万四百三十六両 水銀五万八千六百二十両 炭一万六千六百五十六斛」となっている。「扶桑略記抄」によると、東大寺の大仏の鍍金の黄金を遣唐使を遣わして唐土より買おうと計画したところ、宇佐神宮によって国内から産出する由の託宣があり、間もなく陸奥国から黄金が発見されたとなっているが、水銀については何も書かれ

ていない。しかし、『万葉集』巻第十六に、

仏造る真朱まそほ足らずば水たまる

池田の朝臣が鼻の上を掘れ (三八四一)

真金まがね吹く丹生の真朱の色に出て

言はなくのみぞ吾が恋ふらくは (三五六〇)

とある。前の和歌は「仏造る水銀」という意味で、辰砂から水銀の生産がおこなわれていたと考えられ、後の歌は、水銀を用いて黄金を採集するアマルガム金銀精錬法ではなかったかと考えられる。『百鍊抄』や『水左記』などでは承保三年(一〇七六)に中国からの贈物に相と水銀を返礼として送った話があり、『參天台五台山記』には僧成尋が、延久四年(一〇七二)に肥前国松浦郡壁島より唐船に乗り渡唐する際、日用品や食糧の外に路用として砂金と水銀を持参した話が記されている。後白河法皇のとき東大寺の再興にあたって「そもそも黄金ありといえども、もし水銀なければ仏身成りがたし、しかし伊勢の国の住人大中臣おほなかとみは、水銀二万兩を以て法皇に貢したてまつる、これすなわち彼の人の旧宅にて掘出されたるなり」と『東大寺造立供養記』にある。後白河法皇

の東大寺大仏の供養開眼は文治元年(一一八五)八月二十日であった。

ここで注意しなければならないのは、速見郡石垣荘は、宇佐神宮の本御荘ほんおんじょう十八箇所の一つである。本御荘十八箇所とは、宇佐神宮に寄進された位田・供田などで、宇佐神宮のもっとも基本的な領地であったから、それから成立した荘園を「本御荘」といったのであろう。また、石垣の荘に北接する竈門荘は、天平感宝元年(七四九)六月二十三日、聖武天皇が宇佐弥勒寺の学分として、綿一万屯、稻拾万束、墾田百町を施入した。この墾田百町が竈門荘である。竈門荘については、中山重記の『宇佐八幡の研究』が詳しいので参考にしていただきたい。

ところで、宇佐神宮は上宮、下宮の他に若宮神社を始めとする六摂社、北辰神社、春日神社など十六末社の龐大な神社建築があり、その他、鳥居に至るまで、ことごとと朱塗りの建築である。これに使用された朱の量は龐大な量である。また、宇佐神宮には黄金の神験と称する黄金三延がある。また、上宮の八幡造の前殿(外陣)と後殿(内陣)の接近した軒先の間を黄金の樋を渡してつな

いでいる。黄金の神驗は『八幡宇佐宮御託宣集』などでは、東大寺大仏造立の際に朝廷より奉納されたものであるが、黄金の槌の金や社殿に塗られた朱の産出と奉納は明らかでない。これらの黄金や丹朱は、十郷三箇荘、本御荘十八箇所、常見名田や豊後浦部十五荘などの弥勒寺領から産出、奉納されたと考えて間違いないであろう。

元来、江戸時代以前の鉾山や採鉾の記録は極めて少なく、その上、考古学的発見も少ない。このことから考えると組織的な経済的効率の良い鉾山の開発は、江戸時代以降のことであったと考えられる。『今昔物語』の巻第二十六に「能登の国の鉄を掘る者、佐渡国に行きて黄金を掘りし語」の条に「守の任に其の鉄取る者六人ありける」とあり、能登の国司に弁ずる採鉄者が僅か六人であったことがわかる。このような小規模な採鉾や金属の精錬は遺跡としても、発見し難い面をもっていると考えられる。

建長五年（一二五三）に炎上した宇佐宮の再建は、建長六年二月十四日に仮殿の遷宮がおこなわれた。建長七年九月一日には、豊後国行事所は、豊後国高田荘に、宇

佐宮正殿南楼木材等の勤役を、石垣荘には松皮の勤役を  
下知している。そして翌、建長八年（一二五六）十月二十日には、豊後国行事所は宇佐宮正殿南楼の松皮を勤済させている。このとき、松皮の他に「丹具分」として、  
緑青壹両。朱砂二分。黄土三台。赤丹六升。膠十五筋。  
墨 壹挺。胡粉壹合。随 一。薪 二駄。炭 壹籠。  
を課している。南楼とは現在の勅使門のことである。この『豊後国行事所下文案』（書陵部文書）のなかに書かれている。『朱砂』が辰砂であり『赤丹』が水銀朱であるとするれば、八幡宮の本御荘としての石垣荘、宇佐弥勒寺分として壱田開発された竈門荘が重要な意味をもって  
くる。

『豊後国風土記』の海部の郡丹生の郷の条に「昔時の  
人 此の山の沙を取りて朱沙に該てき」とあるし、『続  
日本紀』の文武二年（六九八）九月乙酉の条に『豊後国  
は真朱を献ず』とあるのは、これまで『豊後国風土記』に  
よって海部郡の丹生（現大分市坂ノ市丹生）とされていたが、  
あなたがら丹生に限るとは決め難くなっている。  
もう三十年になろうか、柴石から発見された土師式土

器の壺を見たことがある。二十種ほどの小壺で肩の処に孔が一つあけられていた。器全体に赤い朱か、または酸化鉄がついていたのを記憶している。その当時は、何の気なしに簡単な実測図を作っておいた。昭和五十九年に『別府市誌』の第三編「別府の歩み」の第一章「ふるさとのおけぼの」を書くため、その実測図を大騒ぎして家さがしたが、どこにしまったか不明であった。この土

器こそ、日本最古の水銀精錬の釜ではないかと考えられる。現在でも柴石の赤泥の層から発見された土器や壺を保存しておられる方をご存じの人は、ぜひご教示を賜りたいと思っている。

それは、別府市の古代が宇佐神宮のみならず、日本の鉱業史の上から、考古学的にも重要な意味をもつ大切な遺物であるということからである。

## ヒゲコという名のカゴ

日名子 洋 一

古語とカゴ ヒゲコという何を想像しますか。

カキといっています。

実は、竹のヒゴで編んだカゴの古語です。古語のカゴ（万葉仮名）には、カタミ（加太美）・シタミ（之太美）・イカキ（以加岐）等がありますが、また語尾が〇〇コ（または〇〇ゴ）と呼ぶカゴも多いようです。参考までに、古語のイカキとは蜘蛛の巣の意味です。ザルの一種で菊底の編目が蜘蛛の巣に似ていることから転化してイ

語尾にコをつくカゴの例は、奈良時代の正倉院の御物の花筥けごがあります。この浅型の花筥は年代記録が天平勝宝九年（七五七）で、わが国最古のカゴとされています。同じ時代の東大寺伝来といわれる全球型の華籠けごも違う漢字を書きますが、やはりケゴといえます。

このほかに、日本書紀の無目籠むめこ、古事記の八目荒籠やむらこ、